池窪弘務作品集８　二〇〇九年（六十三歳）

眠っている間に（小説）

星と泉２号（２００９年）『眠りの間に』を改題

一　夢

六畳一間のアパートに男と住んでいる。男は太郎という平凡極まりない名前をつけられていた。

私は朱雀（すざく）。

この名前も変だ。

太郎は朝の六時に起きる。小用をして、歯を磨き、顔を洗う。野菜サラダを作り、トースターで濃いめに食パンを焼く。自分の分だけ作る。

「どんな夢を見た」

太郎は卓袱台でパンを食べながら寝床の私にいつも同じ事を聞く。

「覚えていない」

私はいつも同じ答を返す。

「僕は、子供の頃の夢を見た」

太郎は夢の中で聞いた童歌を歌ってくれた。

かごめかごめ　籠の中の鳥は
いついつ出やる
夜明けの晩に　鶴と亀が滑った
後ろの正面だあれ？

本当は太郎に抱かれている夢を見た。思い出そうと目を閉じるが、何も見えない。まぶたの闇は夢の闇とは違う。太郎は夢の中にいた。きめ細かい肌。熱く強い性器。激しく打つ鼓動。

太郎は七時に部屋を出て行く。ドアの閉まる音を聞いて私は起きる。トイレにも洗面所にも太郎の名残はない。卓袱台も、キッチンも片付いている。完璧に。誰もいなかったように。野菜サラダを作り、トースターで濃いめに食パンを焼く。インスタントコーヒーを入れる。食パンにバターを多めに塗る。牛乳をコップ一杯飲む。テレビで「おはよう朝日」

を見る。宮根誠司の「行ってらっしゃい」という言葉で、テレビを切る。ぶらりと街に出る。仕事は携帯電話にかかってくる。

「朱雀さんですか」

「はい」

「掲示板を見ました」

男と待ち合わせて、セックスをする。料金をもらう。同じ男とは二度としない。別れ際に「約束を破ったら、怖い人を呼ぶ」と脅す。だから、いつも新しい男が私の前に姿を現す。でも、みんな一緒だ。一日一人。終わったら携帯電話の電源を切る。

一度も電話がかからない日もある。午後三時まで待つ。三時を過ぎると、携帯電話の電源を切って、映画を見る。つまらない映画でもかまわない。闇に身を潜めていると気持ちが落ち着く。

交代で夕食をつくる。つくる気がしない時は、マックを買ってきたり、コンビニ弁当で済ますこともある。でも、当番はきっちりと守る。ご飯がすむと、二人で食器を洗う。当番が洗い、もう一人が拭く。卓袱台を拭き、今日のご褒美に缶ビールを半分っこする。そして、少し話をする。

「今夜はどんな夢を見るか楽しみだ」

と、太郎は言う。太郎は夢のはなしが好きだ。私は殆ど聞き役だ。

「夢は直ぐに忘れるからね。何日もひきずることがない。でも……」

長い沈黙の後、彼が何を話していたのかあやふやになった時、とても静かに言葉を続ける。

「忘れてしまった夢をいつも引きずっているのかも知れないね」

私は太郎の年令も、仕事も知らない。一つの部屋に住みながら、セックスもない。雨宿りで一緒になって、太郎が私の影のようについてきた。

彼は私の目を見る。

「君は夢を見ないのか」

「一度も見たことがない」

私はさらりと言う。

「そう、それは良いことだよ。世界が一つしかない」

私にはいくつもの世界がある。夢で太郎と交わる

世界。知らない男と交わる世界。映画館の暗闇。太郎が眠ったあと、ネットで繋がる世界。みんな私の世界だ。いつの間にか、太郎は静かな寝息を立てている。彼は存在するのだろうか。そして、私は、今夜どんな夢を見るのだろう。

二　言葉のない村

夕食のあと、卓袱台に二人は向かい合う。太郎は夢の話をする。私は太郎の夢の話が好きだ。

夢の中で目が覚めた。奇妙な事だけど、そうとしか言いようがない。いつもの寝床だ。起きてドアを開けると、まだ、夜が明けていない。風景がまるで違う。僕は森の中にいた。そこは言葉のない村だった。だから、とても静かだ。村で人が一人死ぬと、種を一つ植える。その種から一人生まれる。だから、人数は変わらない。何人か知らないけれどね。村人には性がない。男女の区別がない。とても静かな人たちだ。彼等は森の精を呼吸して生きている。言葉に代わるのは一人が小さな穴で生活している。一人瞳だ。互いに瞳を覗き込んで相手を知る。分かると、瞳が青に変わる。いつもは白だ。瞳には青と白しかない。

森には清流がある。彼等は裸で向かい合って、青と白の瞳で交流する。村には見えない動物がいる。動物も声を失っている。村人の手が動物を撫でている。時々、僕の側を風のように通りぬけていく。

私と太郎は裸で向かい合っている。やがて眠る時間が来る。

三　戻れない場所

「ただ乗りはあかんよ」と言うと、男は初めて笑った。

「大丈夫。日当十日分」

「嫌なら帰ってもいいよ」

男は所定のお金を払った。唇の薄い男だ。細いフレームの眼鏡をかけていた。

「女は知らん。機会がなかった」
私は応えなかった。男は卑屈な笑いを浮かべた。
「仕事をクビになった。金が尽きたらホームレスよ。他人ばっかりの都会で、僕はよう生きていかん。誰も知らん奴ばっかりや」
「シャワーを使う？」
「そうだね、蒸すね。梅雨入りしたのかなあ」
リュックサックにナイフが三本入っていた。剥き出しではなくきちんと包装されていた。
性器が触れ合うこともなく男は果てた。
「もう一度する？」
男はまた、卑屈な笑みを浮かべて、首を振った。煙草を勧めたが、「吸わない」と言った。「吸ったこともない」
「家には帰れんし、都会の迷路で野垂れ死に」
「誰でもそうよ。一歩先は」
「何で生きているんだろう俺たち」
「俺たち……」
「ごめん。友達なんて一人もいない。みんなそうだよ。一人一人がバラバラ。不安だから群れているだけ」
煙草の煙を見上げながら男は言った。
「死んでしまえば」
私は言った。男は黙って私を見た。そして、私の煙草を取って吸った。激しく咽せた。
帰り際、「ありがとう」と、男は小さく言った。二度と会わないという約束を忘れた。男とは会うことはないだろう。どこかへ行ってしまう。二度と戻れない場所に。

四　リモコン

私は父親を知らない。一卵性双生児のような母親に育てられた。母に叱られた事も、ほめられた事もない。買い物に行っても、母は幼い私に相談をした。「どちらかなあ。おいしそうなリンゴはどちらかなあ」「どっちの服がいいと思う」。母は子供が欲しかったのではない。友達が欲しかったのだ。私が二十歳になった時、当然のように母子は別れた。それから一度も会っていない。

雨の音で目覚めた。ドアを小さく叩く音がした。ドアを開けると、見知らぬ男が立っていた。右手にリモコンを持っている。私はずいぶん前から男が父親だと知っている。

五　扇風機　1

居間に扇風機がある。九月も半ば、つけることはほとんどはない。

でもそこにある。太郎は無頓着だ。私は時々、空気を動かすのにスイッチを入れる。だから、冬になっても扇風機は居場所があるのかも知れない。

六　扇風機　2

太郎が扇風機の羽根を拭いている。とても丁寧に。終わると二人できれいな風に当たった。耳を澄ますと、秋の虫の声がする。私は太郎にもたれかかって虫の声を聞いた。

「あの虫いつまで生きるんだろう」と太郎が言った。

「永遠に生きるよ」と私は言った。

一日でも永遠。太郎は黙って私の髪を撫でた。死ぬのなんて怖くない。

七　傷

恐がりの私は滅多に怪我をしないのに、スライス器（正しくはなんて言うのだろう。キュウリをスライスしたり、山芋をすり下ろしたりする調理器具）で親指の先を切ってしまった。血が出て痛かった。テープを貼ると少しましになった。二日目テープを取るとまだ血が出た。痛みもある。四日目には直っていた。傷跡もなかった。私の傷を治したのは私の中にある命だと思う。生命（いのち）の営みだと思う。私の中で無数の命が動いている。命が私をつくっている。私はうずくまり、私の中で起こっていることを感じようとする。目を閉じると、無数の命が見える。無数の命を感じる。生きているのが怖い。

八　青木さん1

ある日娼婦の仕事が急に嫌になった。あの仕事をするぐらいなら死んだ方がいいと思った。男の匂いがたまらなく嫌になった。でも、働かなくては生きていけない。太郎に食べさせてもらうわけにはいかない。太郎とはそんな関係ではない。新聞のチラシにあった。スーパー浦西。時給700円。私は初めて履歴書を書いた。

××短大卒業。職歴なし。

店長は若い男だった。24才の私とたいして違わないだろう。

「まずレジをお願いします」

青木さんを紹介された。50才ぐらいのおばさんだった。私は並んでおばさんの仕事を見ていた。しわがれた声。風邪を引いているのかと思ったが地声らしい。バーコードを読み込ませる。物によっては入力する。客からのお金を入力する。釣り銭が自動で出てくる。レシートと釣り銭を客に渡す。例外もある。レジで50％引きなら、レジ打ちが複雑になる。青木総菜などバーコードがない物は一覧表を見る。青木さんはほとんど見ない、覚えているのだ。バーコードがない商品も結構多い。これは大変だ。私に出来るかしら。私は頭が悪い。

「大丈夫よ。なれだから」

私の心の中を見透かしたように青木さんが言った。客が途絶えたとき私がレジに入った。青木さんが横に立つ。青木さんが簡単にこなしていた仕事は私には簡単ではない。バーコードが一度で読めない。焦ると二度読んでしまう。客の怪訝そうな目が私を射るように見る。目を皿のようにしてレシートを見る。主婦ってなんて意地が悪いのだろう。一日が終わるとくたくたになった。でも気持ちがいい。とても。

「ありがとうございました」と言っても、青木さんは黙っていた。青木さんは遅番であと1時間残る。

一週間経って、一人でレジに立った。気を抜くとあっという間に客が並ぶ。二人以上並ばすながノルマなのに。

「家に遊びに来ない？」

青木さんが言った。レジに並んでいた時以外ほとんど話すことがなかった。青木さんと言うより、私

は店の人とほとんど喋らなかった。昼食は外でパンを食べていた。店員のほとんどが店で買うのに、私はコンビニで買った。変な子だと思われているだろう。でも、娼婦だなんて誰も思わないだろう。でも、娼婦だよ。

何時もなら断った。でも、青木さんには借りがあった。うなずいてしまった。

九　ひずみ

太郎との生活にひずみが出来た。太郎は外に出なくなった。

太郎がいなくなった。服に血をつけて帰ってきた。

「どうしたの？」

と、私が言うと、

「どうしても」

と、太郎は言った。

近くで人が殺された。

「あなたじゃないの？」

と、聞くと、

「そうだよ」

と、太郎は答えた。

目が覚めた。いつもより、30分遅い。トイレにも洗面所にも太郎の名残はない。卓袱台も、キッチンも片付いている。完璧に。誰もいなかったように。夢だった。夢と現実はそれほど違うのだろうか。いつでも振り子のように入れ替わる。

十　青木さん　2

青木さんの家は四軒つながった長屋の一番左だった。小さな家だ。中は二間。私のアパートと同じだ。スーパー浦西で買ってきた総菜をテーブルに並べた。ガラッと戸が開いて、ごま塩頭の男が顔を出した。

「お帰り」

男は急いで戸を閉めた。

「夫よ。恥ずかしがり屋なんだ」

青木さんは携帯電話をかけた。部屋の隅に行って、何か喋っている。

「すぐにうるさくなるよ」
携帯電話をたたんで青木さんは言った。
ご主人はうつむき気味にテーブルについた。テレビのチャンネルを変えたりしている。三人でビールを一本空けた頃から、ご主人は急に饒舌になった。なるほどうるさくなった。仕事はトラックの運転手。
「お子さんは？　」
と、聞いた。
「高二の男の子。今は塾に行っている」
「鳶が鷹を生んだといきたいところだが、やっぱり鳶は鳶」
と、ご主人。
「大学は誰でも入れる時代だから、行かせてやりたいね。私は中学しか出ていないからね」
ご主人はビールから焼酎に変わっている。
「ただいま」
男の子が帰ってきた。
「お帰り、一緒に食べよう」
「いいよ」
男の子は机の前に腰掛けた。青木さんは総菜を皿に取り、大きな茶碗にご飯を大盛りにした。
「よく食べるのよ」
と、青木さんは笑った。

青木さんの家の話をしたら、急に太郎が泣き出した。泣くようなことは何もないのに、太郎は泣いた。太郎のことを何も知らない私は、一緒に泣くことしかできない。二人はただ泣いていた。

十一　泡

スーパー浦西で突然私は壊れた。レモンを囓り、バナナを卑猥に食べた。店長が私を事務室に連れて行った。
「どうしたのですか？」
「私は時々壊れる」
「壊れる？」
「前は高校の時、教室で壊れた」
「どうしますか？　沢山のお客さんが見ていましたからね」

「すいません、辞めさせていただきます」
「残念ですが。少し待って下さい。精算しますから」
精算という言葉がおかしかったので笑った。もう娼婦に戻れないし、死のうかなあと思った。太郎も、あの泣いた夜の次の日から帰ってこない。太郎なんていたのだろうか。眠っている間に生まれて、残像が少し残って、また、眠っている間に帰って行く。給料をもらって事務所を出た。店内は今までと違う世界のように見えた。青木さんの背中に頭を下げて、スーパー浦西を出た。もう秋の気配が濃い。嫌な冬も駆け足でやってくるだろう。
四年ぶりに母が来た。
「よくここが分かったね」
「朱雀が好きそうな町だから」
「そう、浦西は私が好きそうな町。入って」
私はドアを開けた。
二人は黙って向かい合いながらビールを飲んだ。
「一人なのね」
「そうよ」
「仕事は？」
「今日辞めた。壊れたから」
「壊れた？」
「うん」
母は暫く黙ってビールを飲んでいた。私は冷蔵庫からハムを取り出して切った。それとビールを二本。
「壊れるから、生まれるのよ。崖の上のポニョを観たの」
母は背中を向けたまま言った。
「お母さん、映画なんて観るの」
ハムの皿とビールを持った私が言った。
「観るわよ映画ぐらい。子供が一杯だった。ポーニョ ポーニョ ポニョ さかなの子 青い海からやってきた」
やっぱり音痴だ。
「映画の中で『みんな泡から生まれる』というセリフがあるの」
「泡から生まれる……」
「パチンと泡がはじけて、もう昨日には戻れない。眠っている間に、また、明日の新しい泡が浮かぶ」

母はそう言って、新しいビールの栓を開けた。

うたたねから覚めると、母の姿はなかった。母の居場所も聞かなかった。会いたくなったら会いに来るだろう。そんな距離がいいと思う。コップもビール瓶もきれいに片付けてある。明日一日生きてみようと思った。

平成二〇年十二月七日（日）　了